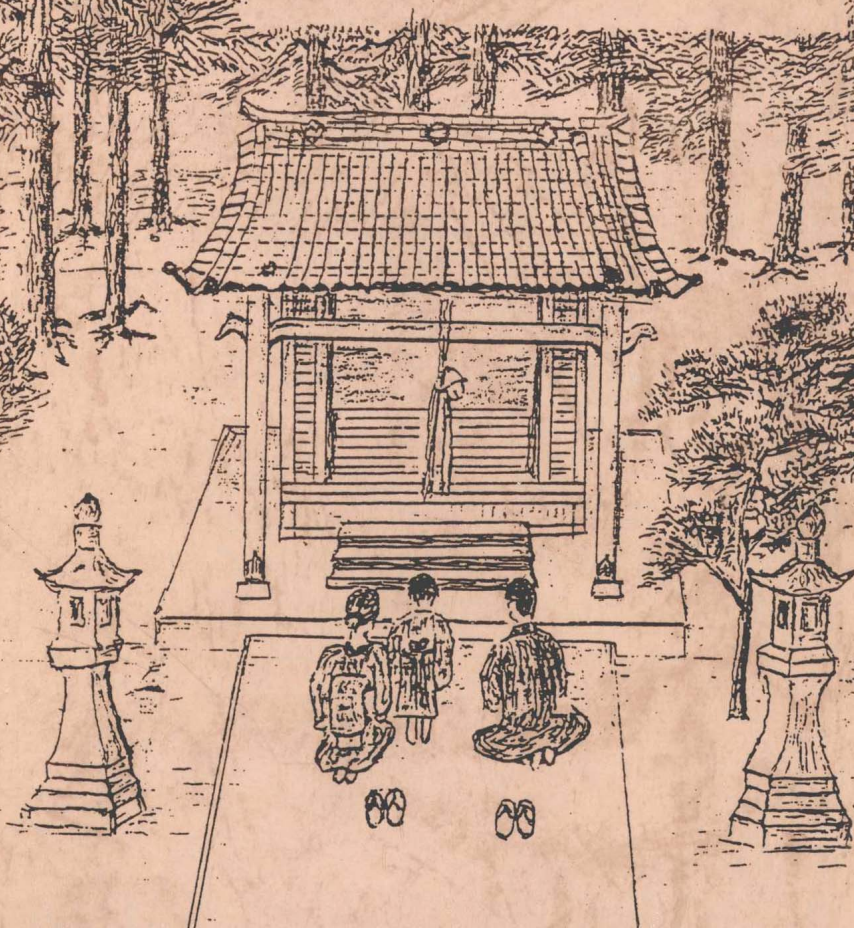


燃え尽きた青春

小澤孝太郎 著



小澤孝太郎

燃え尽きた青春

平成元年十月四日 発行

発行者 小澤孝太郎

印刷 精美堂印刷所

平和で豊かな
世であればこそ
ささやかな記録を
3 0 0 万の霊に捧ぐ

まえがき

対艦巨砲主義の時代も航空力主導と変って、国内の大仏から銅像・記念碑・橋の金具・各家庭の鍋釜に至るまで直接必需品以外は総て取壊して供出され国民の総力で完成された、世界最大の戦艦武蔵・大和も無用の長物となって特攻につき込まれた。

四代目艦長の猪口敏平海軍少将は日本海軍屈指の大口経砲（口径三五糎以上の砲）射法理論の権威者であったが、武蔵の戦没二ヶ月前に三代艦長の朝倉豊次海軍少将に代って着任し、国民の艦を沈める責任から只一人艦橋に残って艦と運命を共にさせられたのである。

レイテ島の特攻に明日出撃する、一五歳から一六歳の少年特攻隊員がマニラの料亭広松に司令官の決別の宴に招待され、料亭のお女将^{かみ}さんに「一言おかあさんと言わして下さい」と頼んでお互いに軍歌と共に「桃太郎さん」や「まさかり担いた金太郎」幼年の頃の歌を歌って翌日は死地に赴いたのである。

戦争によって廃虚となった国土も国民の忍耐と努力によって今日の平和とますます豊かな繁栄が続けているが、戦場で散って行った多くの英霊達の誰れもが日本のこの平和な繁栄を願い、確信して潔く戦ったのである。戦争は如何に惨めで残酷であるかを訴え、戦争のない平和な繁栄こそが英霊に応える唯一の供養と願い、支那事変から大太平洋戦争の青春期を燃やし……燃え尽きた一個人の記録を戦争を知らない世代に贈り度い。

武蔵野の寓居に於て 小澤 孝太郎 記

徴兵検査

昭和十一年の青葉の頃と記憶しているが、入間郡下の徴兵検査が入間川町小学校で厳格に施行された（レントゲンも無い時）、此の日が青春を燃えたぎらせた海軍勤務を決定するスタートラインであった。全裸となって身長・体重から呼吸器、特に性病と厳しい身体検査、終ると一人一人検査官（現役の陸軍将校）の前に立って判定を受けるのである。

公民学校訓練で身につけた不動の姿勢で検査官の前に立った私に、「甲種合格」力の籠った判定が下された。一般に判定を受けると敬礼して、次の者の番になったが、私はすかさず不動の姿勢のまま檀上の検査官に「海軍を希望します」と力強く申告した、机の書類に目を落した検査官は間もなくこぶしで机を叩き乍ら「よし」と言われたのである。入間郡下で海軍は七人四番で海軍の入籍となった。

徴集令状

昭和十一年初秋の頃徴集令状が届いた。「昭和十二年一月十日 横須賀海兵団に入団すべし」である。早朝の店（精肉店、料理店）の雑布掛けも入団までに長文の五ヶ条の御誓文を暗記すべく暇あれば暗誦に努力した。夜は店を閉めてから人通りの少い路上を駆まで往復馳け足を毎晩（〇時過ぎ）行って足を鍛えた。（入団してみると海軍では一ヶ分隊一六〇名中五ヶ条の御誓文を暗記している者は私の外五名程であった。）

出 征

一月十日入団の前日の一月九日に関東地方の入団者は江の島の岩本楼に宿泊を指示されていたので「祝入団横須賀海兵団」の親籍、知人から送られた織りを立て、家の者、近所の人、青年団、在郷軍人、消防団、町役場の山田兵事主任、親戚の人々に送られ、神明社々頭に立って武運長久の祈願、お拔いを受けて、町内大通りを所沢駅に。江の島の岩本楼には海兵団からの案内の士官、下士官兵が来ていて何かと世話して指導して呉れた。（戦後現在でも江の島を訪れると石の坂の旅館街に大きな旅館の岩本楼がある。）この当時から暫らくは江の島に渡る栈橋は足場丸太を建てた狭い板敷の橋だった。

横須賀海兵団入団（昭和十二年一月十日）

午前八時頃から各地区（関東地方、北陸、東北、信越、北海道）からの入団者、見送人で、札の立った指定の場所に集結、広い兵舎前の練兵場を埋め尽くす。受持の教班長が決まる。二四分隊九教班海軍二等兵曹、星正さん（後に上海陸戦隊で手旗送信中敵弾を受けながらも任務を遂行して戦死、海軍部内の雑誌「帝海」に記載された）星教班長に連れられ兵舎内に入り衣類寝具一式配られ、軍服を着る。海軍四等水兵はマークも何もない真黒な水兵服であるところから海軍四等水兵は「カラス」とも言われた。

郷里から着用して来た青年学校の正服、下着全部を風呂敷に包んで練兵場に待っていた付添に渡した。

入団式が開始され、海兵団長海軍大佐副島大助より「海軍四等水兵を命ず」と命ぜられ海軍の新兵となった。海兵団の教育は厳しいものであった。

カッター教育の訓練は一班から一二班の一二隻のボートを使う悪い教班長のカッターは爪筭で頭を投ぐられ、接岸したカッターの中に血が流れていた。激しい訓練に疲れ空腹の夕食を、テーブルを持ち上げて全部デッキに撒かれ、空腹の翌日の朝食も、午前の訓練後の昼食も、二日にわたって三食も食べさせられず、気の毒な程、班員全員が参った事もある。

私の教班長星正さんは不手際をやると寄って来て手を取るように教え、他のカッターが訓練中に、横須賀市外の岸壁にカッターを着岸させ、自分のマネーで大福餅を買わせ班員に食べさせたり、温情ある教育をして呉れた。

海兵団卒業近く、各自の希望所轄を申告した。私は海軍に入った以上、日本一の軍艦、日本一の大砲の砲手になりたいと当時最大の軍艦陸奥の主砲員を希望して書き出した。希望通り新兵としては一門に只一人の配置（他の新兵は弾庫、火薬庫）海兵団の成績順に一番砲塔右砲、次が左砲、二番砲塔右砲、左砲と四番砲塔まで砲員の新兵は八人幸運にも一番主砲々塔右砲の四番砲手と決まった。

海兵団卒業と同時に横須賀港内に碇泊中の軍艦陸奥に乗り組むことが出来た。時に昭和十二年五月十五日で、海兵団卒業で海軍三等水兵となって、カラスの袖に錨のマークが付いた。

支那事変

第一艦隊第一戦隊主力艦の艦隊訓練が日夜行なわれ主砲は電氣的（方位盤射撃装置）に各砲側の盤面に基針が微妙に指示作動するものを、砲を操作する射手、施囲手が追針で合せて砲を操作する（基針と追針が重さなっている時だけ発砲電流が砲に通じて発砲する）朝起床時から夜までこの針合せが、射手、施囲手の訓練で、他の砲員は揚弾、揚葉、装填の操作を繰り返し、如何にして発射速度を一秒でも早くするか、被害を受けた場合の応急処置の適速に寸暇の無駄のない猛訓練の毎日であった。

艦隊訓練の合間に鹿児島、別府、呉、佐世保、伊勢、志布志等各地の上陸休養もあって、各地の国防婦人会の歓迎を受けた。（支那沿岸の鎮威航海の折、旅順港、二〇三高地も見学）。

昭和十二年七月七日 支那事変勃発艦隊は一斉に横須賀弾薬庫から戦時塔載量の弾薬及食糧を塔載して出港、三津浜で陸軍部隊を乗せ、抗洲湾に陸軍部隊を揚陸させ、上海近郊から南に沿岸沿いに艦載機を射出して偵察、爆撃して、機と連絡をとって、主砲射撃を浴せた。支那兵も四〇浬の艦砲射撃には膽を潰したであろう（次頁写真）。

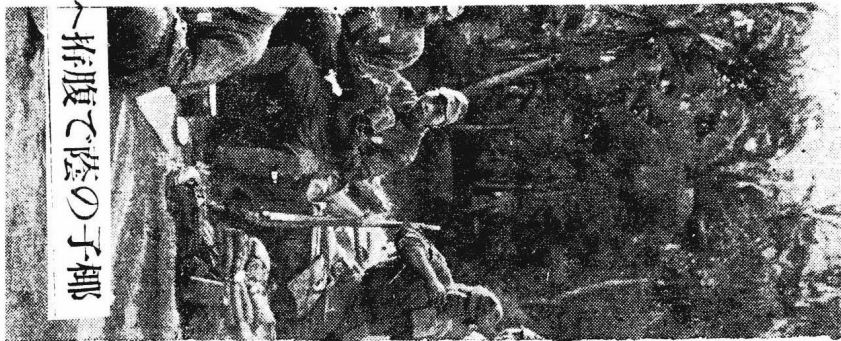
昭和十三年五月一日 海軍二等兵に進級。第八〇期普通科砲術練習生試験に合格。五月二十一日、陸奥退艦横須賀海軍砲術学校入校、砲術全般の基礎教育（弾道学、氣象学、電気学、数学、操砲、陸戦、工学）を、夜間の温習にも勉強させられた。戦地に従軍を願い砲術学校卒業の進路希望に支那方面艦隊とした所因の島造船所に入梁中の駆逐艦松風に乗組みを命ぜられ、陸行、尾の道から連絡船に乗って、因の島着、二ヶ月余り松風の整備完了まで、造船所近くの小高い所の民家に下宿をとる。内

海は湖水の様に静かで、早朝出漁の魚船の煙突からポンポンと煙りの輪が上って長閑な風景である。造船所の広場で毎朝行う海軍体操の号令番も、砲術学校で修得した私の役であった。戦艦陸奥から比べると駆逐艦は笹舟の様に狭く感じた。ドックを出ると南支封鎖艦隊第四五駆逐隊の司令駆逐艦となつて、その編成は松風、旗風、春風、秋風の四隻で、司令駆逐艦松風の司令官は佐藤海軍大佐であつて、私は前甲板の一番砲の一番砲手の配置、更に重大な役目は司令官の従兵であつて司令官の身の廻り一際のお世話をしなければならなかつた。

支那沿岸の偵察。
爆撃を終って帰艦
収容される水偵。
軍艦陸奥飛行甲板
操縦士 佐久間飛行長
12年8月25日



十三年十一月十日 松風乗組。十三年十一月一日 海軍兵長を命ぜられ、南支方面艦隊となつて上海以南の南支那海沿岸の海上封鎖任務に当る。温州沿岸の萬山群島、三都奥の海上封鎖、十四年一月は福州に松風の陸戦隊配置の私は軽機関銃を受持ちである。十四年二月十一日紀元節に海南攻略作戦が開始された。上



椰子の陸で腹を揉む

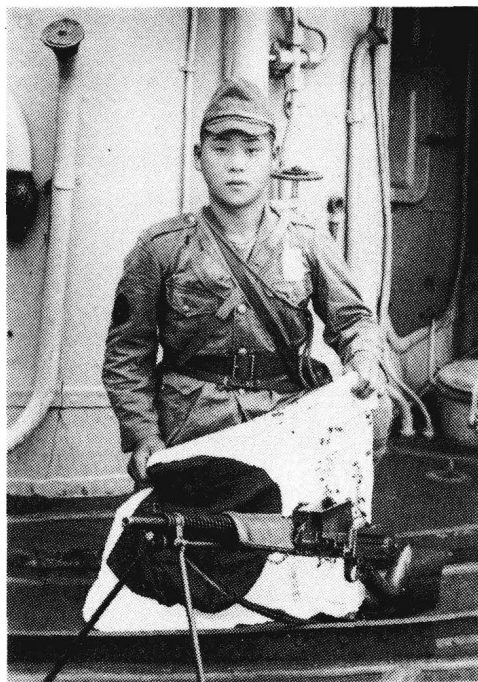
[illegible]

隊をはじめ赫々たる海軍部隊の戦果につ

分二千五百

一、

ついで戦果



海南島攻略戦
敵前上陸 陸戦隊参加のため
駆逐艦松風艦上にて

14.2.5 上等水兵 筆者

があるのかと思う。この敵前上陸の開始前に南支艦隊の艦艇は三垂港の秀英砲台を鎮黙せしめるために、沖に一齐に打錨して砲列を敷いた。

旗艦高雄は一萬吨巡洋艦主砲は二〇糎、射程の短い砲艦、海防艦は秀英砲台の近く、間隔を置いて駆逐艦隊、高雄は更に五〇〇米沖に打錨したのである。

秀英砲台には旧式の三〇糎砲が二門あって我が艦隊に対して砲撃を開始した。松風、朝風は艦列の中央に位置して日本艦隊も「打ち方始め」で各艦一斉射撃である敵砲台の砲弾が松風の前・後に水柱を立てる頭上を飛び越す砲弾はうなりを伴って不気味である。駆逐艦松風型の砲台は甲板にむき出しの身体である。

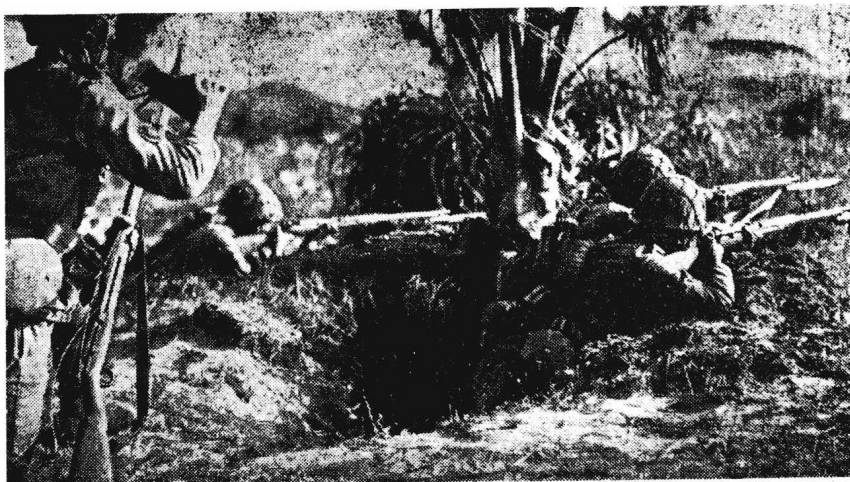
水柱の中にいるので当たらないのが不思議なくらいで海戦気分を味合うことが出来る。艦砲射撃を受けた者でないと解らない。想像を絶した恐しい威力である。砲撃戦は二〇分程で終わった。

猛烈な艦砲の一斉射撃に敵兵は多大の損害を受けて砲台を捨て、遁走したのである。



14年2月
15日頃占領
直後の秀英砲台

海南東秀英砲台入口（裏側）
砲身は海上に向け外側にある。



南海島崖縣城附近掃蕩戰—太田陸戰隊勇士—杉浦特派員



休憩中の部隊 南海島にて

未明に海岸に敵前上陸した陸軍部隊は残敵を掃斗、進撃を続けている。艦の左手内陸部上空に残敵に急降下爆撃を加える九七式飛行艇が見える。

十四年二月十四日海南島崖県に入城、入港している旗艦高雄より真水、食料の補給を受け、艦艇からの陸戦隊は高雄に撤収され、合流した松風に帰艦した十四年六月は温州港の封鎖作戦が始まって大型ジャンクを多数集め玉石を満載、湾口に沈めて封鎖したり沿岸に活動する海賊に捕獲兵器を与えて港湾内に進入せしめ、港内の大型汽船を捕獲せしめたり作戦によく協力した。交戦し負傷した者は松風の軍医が手当てをしてやった。(同じ中国人であり浸入が容易)。この頃、馬祖島で大型ジャンクを捕獲、太いロープで松風が曳行、ジャンクには私と同年の桜庭が舵取りに乗って沖に出た。外洋に出て間もなく、高さ二〇米もの巨大な波が押し寄せ、太いロープが切れて高波の中にとり残されてしまった。

艦長は艦に後進をかけたが、小山の上の艦は波の上に乗って出た、スクリューが空転している、ジャンクから見る

と山の上に松風が乗っている。ジャンクが波の上になると、目の下に艦の後甲板に集まって、心配の乗組員が見える。艦長は艦を前進させ、波間に艦は全く見えなくなった。どうしてあの高波の中で施回したか、艦長は真後ろから併行に駆逐艦を進めて来た。艦とジャンクは激しく上下にすれ変わる間は一秒である。艦の手摺りに飛び付いて二人とも助かった。艦長から士官心配していた乗組員も喜んで呉れた。間もなく忘れる事の出来ない光景が出現した。

ジャンクは私が飛び乗ると、バラバラとなって解体してしまい、多くの破片の板切れの一枚に猫がずぶ濡れとなって爪を立て必死にしがみついて、さらに驚いたのは、一片の長さ一米もない破片に把まつている猫の目の前に一匹のねずみがずぶ濡れで、爪を立て流されまいと必死の「寝食を忘れ」の状態をまざまざと目の前にしたのである。

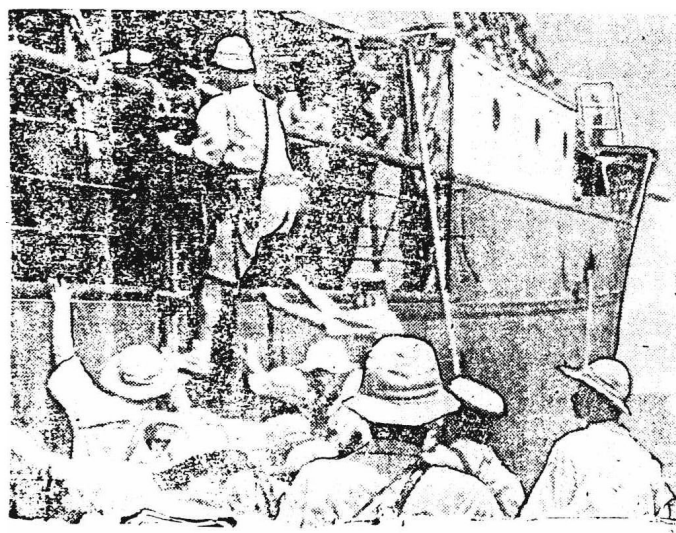
日本海軍に支那海沿岸を封鎖され、支那は物資が欠乏して物価が上昇して来た。封鎖を犯しても英国、ノルエー、デンマーク、各国の商船が物資を満載してやって来る。一隻の荷で莫大な金額となるのである。封鎖艦隊の松風も島蔭で出入船舶を二四時間見張って、発見すると、まず旗流信号で停船を送るのである。それも無視して通り過ぎる場合は、「一番砲発射用意」となる私達砲員の出る番である。射手、施回手は照準する。照尺手が規定より五〇米照尺をずらす。私が尾栓を開け弾丸、火薬を装填させ、尾栓を閉めて、砲尾に軽く手をかけて「よし」と唱える「打て」発射された弾丸は正確に商船の進路五〇米先に水柱を立てる。一発で商船は停止する。艦内に「臨検隊用意」のスピーカーが流れ、内火艇が卸される。

大部分の船舶が援将物資を載んでいて、機関部、ブリッジに松風の臨検隊員が見張りに付いて馬公

鎮海沖外國船臨檢

海軍封鎖隊検査影

臨検援將物資を積載せる
輸送船九隻を馬公に連行
英國驅逐艦急追し来たり
砲を向け合い対峙せる事もあり



まで連行した。

南支那海は十月頃から四月頃まで特有のモンsoon（季節風）の荒波にもまれ耐えなくてはならなかった。錨を入れて停泊していても、グラリグラリ左右に揺れる。食事の鍋も天井のハンモックを釣るフックに吊り、食器も食卓から滑り落ちてしまう状態であった。

乗艦当初の二・三月は喰べ物も全部吐いてしまつて、込み上げる吐き気に苦しむが、馴れると他人の分まで喰べられるようになる。荒天の航海中は駆逐艦以下の小艦艇では艦内に通路が無いので前部から後部までロップを張つてこれを利用する。馴れると波の状態を見がら靴も濡さないが、馴れない者は途中のロップにぶらさがつてずぶ濡れである。甲板を洗う波に毎年一人位はさらわれて行くえ不明者が出たのである。

荒天中の航海で艦橋に立った当番の交退も出来なくなると一晩中でも交退のない勤務となる場合もあった。作戦中でも特に配置に就いた者以外は早朝の体操を行ったが、号令番は私の役で後部三番砲の砲台に上つて当直以外の士官